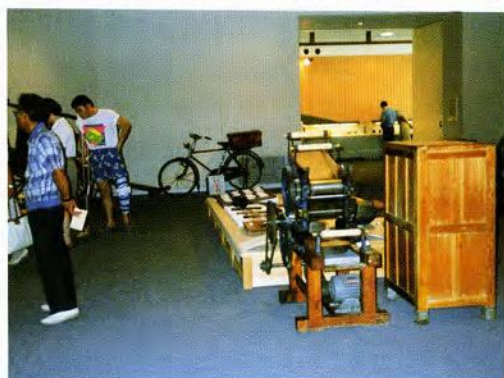


第2回 収蔵品展について

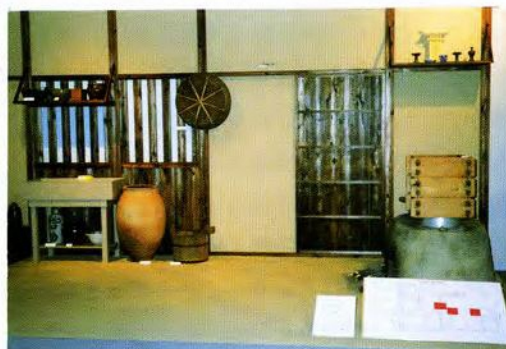
第2回収蔵品展『民具・人そしてぬくもり』は平成3年8月6日（火）から9月8日（日）まで開催されました。

展示資料は昨年度に引き続き、昭和59年から61年にかけて当館に寄贈された民具約1,500点の中から、下記の7テーマを設定した約120点です。

1. 戦時下の暮らし
主に銃後の人々の生活を中心に展示。
2. 別 珍
近代川越の名産品として有名な「別珍」を工程順に展示。
3. 災害に備えて
一括寄贈を受けた古谷第6消防団関係の資料を展示。
4. 親から子へ
明治から戦前にかけての衣料品を展示。
5. マユカキまで
下小坂地区を中心に寄贈を受けた養蚕道具



展示室内



農家の土間を再現

を作業工程順に展示。

6. まゆから布へ
まゆから糸、そして布になっていく工程を展示。
7. 食事と団らん
明治時代の夕餉風景を「台所」と「食事の間」を復元して展示。
8. 伝統の味を守る
「菓子職人」と「うどん職人」の関係資料を展示。

従来、収蔵資料を展示するとき、寄贈者ごとにまとめて陳列するが多かったように思われます。しかし、民具という資料の性格を考えると、その資料単独では意味を為さないものが多々あります。これは他の関係する資料と組み合わせ、1つの意味を伴ってくるのです。今回も民家の台所の復元を行いました。釜や鍋、水瓶など、台所の一部として、はじめてその本来の機能を語りはじめます。

今後も、単に資料を見せるだけでなく、その資料の使用されている状態の復元を含めた展示を行っていきたいと考えています。

1本の円筒埴輪から

—伝 下小坂出土の円筒埴輪について—

〔1〕はじめに

みなさんは「はにわ」という言葉を聞いたとき、どんなものを思い浮かべますか？

よろいを身につけた武人や壺を捧げた巫女、馬や鹿・水鳥などの動物、入母屋造りの豪壮な家を思い描く方もいるかもしれません。こうした人や動物、家や器物などを写実的に表した埴輪は「形象埴輪」と呼ばれています。形象埴輪の様々な造形からは埴輪工人たちのやさしいまなざしや手先のぬくもりが伝わってきます。巫女のつぶらな瞳や首をかしげた馬の愛らしいしぐさに、古代への思いは限りなくふくらみます。

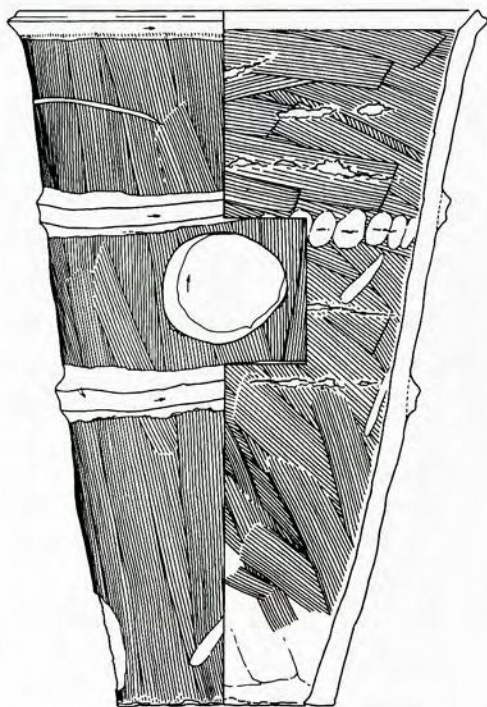
しかし、古墳に樹てられた埴輪のすべてが形象埴輪だったわけではありません。むしろ、葬送用の器物から発展した「円筒埴輪」や「朝顔形埴輪」といった単純な形のものが大部分です。

これからみなさんに紹介するのは、市内下小坂出土と伝えられる1本の円筒埴輪です。永い間、県立川越高校に保管され、現在は博物館に展示されています。ここでは、形象埴輪の影で見落とされがちな円筒埴輪から何がわかるのか、お話ししたいと思います。

〔2〕円筒埴輪の作りかた

この円筒埴輪は、高さ42.8cm、口径28.2cm、底径13.2cmほどの大きさで、口縁部の約2/3を欠いています（第1図）。円筒形の胴部には丸い孔が穿けられ、上下に2本の粘土紐が貼り付けられています。「2条凸帯3段構成」と呼ばれるタイプの円筒埴輪です。色調は淡褐色です。

この円筒埴輪を細かく見てみると、櫛の歯でつけられたような細かい筋がたくさん観察されます。また、内側には大きなひびが横に走り、指の跡がベタベタと残っています。こうした痕跡はこの円筒埴輪が作られる時についたものです。



0 10cm

第1図 伝 下小坂出土円筒埴輪（1/5）

円筒埴輪は粘土の紐を積み上げて作られています。手順としては、まず一番底の土台となる部分を太い粘土帯を輪にして作り、適当な高さまで粘土紐を重ねてゆきます。この時、粘土紐どうしがうまく貼り付くように杉などの板の小口で平らにならしめます。表面についた細かい筋の正体は板の小口に現れた木の年輪だったのです。また、粘土紐の積み上げは乾燥時間をおいて行う必要があります。これは上にゆくにしがって粘土自身の重さにより底部の形が崩れてしまうためです。乾燥時間をおいた部分は横走るひびとして残り、指で丁寧につぶしている所もあります。新しい時期の円筒埴輪は乾燥時間を省いて成形するため、形崩れしたものが多いの

時期	6世紀前葉		6世紀後葉	
	牛塚山3号墳	伝 下小坂出土品	多宝塔古墳	南大塚4号墳
円筒埴輪				
土器				

ですが、本品はきちんとした手順で成形され、薄手に仕上がっています。全体の形ができると、2本の粘土紐を貼り付け、刀子（ナイフ）で孔をくりぬきます。粘土紐を貼り付けてゆく方向や工具の使い方のクセから、この円筒埴輪が右ききの工人によって作られたことがわかります。

〔3〕 円筒埴輪の年代

次は、この円筒埴輪の作られた年代について考えてみましょう。手掛かりとなるのは、円筒埴輪のプローション（形態）です。本品は底径に比べて口径が比較的大きく作られているのが特徴です。また、口縁部から上の粘土紐の間（第3段）、2本の粘土紐の間（第2段）がほぼ等間隔なのに対し、下の粘土紐と底部との間（第1段）がいくぶん長いことも注目されます。

この形態的な特徴は入間郡内で出土した他の円筒埴輪と比較すると、更にはっきりします。

例えば、坂戸市小沼の牛塚山3号墳のものは、

口径と底径の差が大きく、2本の粘土紐を均等に割り付けています。また、市内仙波の多宝塔古墳では、口径と底径の差が小さく、第1段が長いものが出土しています。市内豊田新田の南大塚4号墳の円筒埴輪は、口径・底径の差は更に小さく、第1段が高さの約半分を占めています。底部の崩れを整えた「底部調整」を行っているのも特徴です。

「円筒埴輪は新しくなると口径と底径の差が小さくなり、第1段が長くなる」と仮定すると、牛塚山3号墳→伝 下小坂出土品→多宝塔古墳→南大塚4号墳という変遷が推定されます（第2図）。牛塚山3号墳では6世紀前葉、南大塚4号墳では6世紀後葉の土器と一緒に出土しているので、この変化の方向と矛盾しません。

以上のことから、この円筒埴輪の製作年代は6世紀中葉ごろと考えられます。

（学芸員 岡田 賢治）

「徳川家康一字書出について」

(1) 昨年3月19日から5月12日まで開催された企画展「松平周防守と川越藩」の準備を進め
る中で、光西寺蔵松井家文書を実見する機会
を得た。この文書には、県指定中世文書18点
をはじめ、近世文書・家譜・城絵図なども含
まれている。

その中でも「徳川家康一字書出」について
は、徳川家康発給文書の中でもきわめて数が
少なく、また一字書出という特殊な性質から、
家康発給文書の中では貴重な資料だと思う。
そこで今回この一字書出を紹介し、その価値
を再検討してみたいと思う。

(2) この一字書出は、徳川家康がその家臣である
松平左近丞の元服の際に「康」の一字を与
えて「康次」と名乗らせた文書である。

縦323mm、横441mmの折紙であり、紙は壇紙
ではあるが、厚く表面の凹凸がかなりあるこ



徳川家康一字書出（写）

天正十一年
三月十六日家康
（花押）
松平左近丞
殿

康 字

書き下し文（折紙）

とから、江戸時代に用いられた壇紙であろう。
また書かれている字体や墨も、同年代のもの
よりは新しく感じられる。以上のことから、
これは原本ではなく、江戸時代の写しである
と思われる。

ただこの一字書出の花押は、同時期の家康
の花押とたいへん類似している。

一般的に一字書出は、多くの戦国大名が発
給している。紙は壇紙が用いられ、たいてい
の場合嫡子が元服した際に、主君がその祝儀
として名前の一字を与えるという儀礼的意味
が強いという。この一字書出の場合も、その
ような儀礼的意味だけのものであろうか。

(3) そこでまず、徳川家康が発給した他の一字
書出との比較であるが、現在確認できる「徳
川家康一字書出」は4点あり、そのうち3点
は天正年間に発給されたものである。

	年 月 日	差出人	宛 所
1	永禄4年6月18日	松平元康	松平新七郎
2	天正11年3月16日	徳川家康	松平左近丞（康次）
3	" 14年4月16日	"	松平新六郎（康貞）
4	" 14年6月20日	"	下條六郎次郎

（『徳川家康文書の研究』などを参照）

形式もそれぞれ異なっており一定していな
い。この一字書出の形式は、「字」が最初に、次
の行に「康」、次の行に年、次の行に月日でそ
の下に「家康」と家康の花押、次の行に宛所
という順である。一番似ている形式は、天正
14年(1586)4月16日、下條六郎次郎に発給し
た一字書出である。そして、他の3点の一字
書出の宛所はすべて“新七郎”など“通称”
であるが、この一字書出だけが“左近丞”と
“官途名”で書かれている。しかし4点の一
字書出とも、松平新六郎が、“康貞”と名乗っ
たように、すべて元服の際に家康が「康」の
一字を与えて名乗らせたという儀礼的意味の
ものであり、この点では共通している。

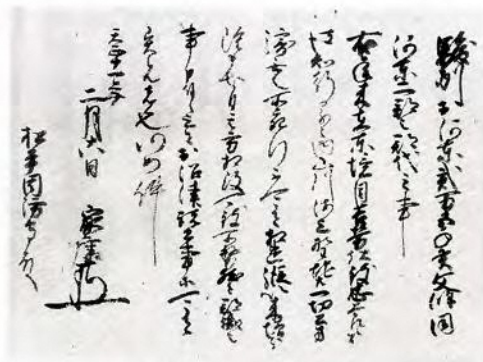
(4) 次に、この頃の時代背景と絡めて考えてみたい。

この一字書出が発給された前年の天正10年(1582)には、まず3月に武田勝頼が甲州田野で自害し、武田氏が滅亡した。これにより、甲斐は織田領となった。駿河は徳川領となり、沼津の三枚橋城主には松平康次の父松平周防守康親が任ぜられた。また6月には本能寺の変が起り、この事件を契機に徳川家康は甲斐に進出し、同じく甲斐に進出を図ろうとしていた後北条氏と対立する形となった。このため、後北条領と境を接する沼津付近は、緊迫した状態となったであろう。後北条氏との和議は同年10月に成立したが、和議の条件の1つであった家康の娘、督姫を北条氏直に嫁がせたのは、翌11年8月のことであった。このため、天正10年10月から翌年の8月までは戦はなかったとはいえ、後北条領との境は緊張状態が続いたであろうし、この地の城を守る松平康親・康次父子の立場もより一層重要なものとなったであろう。その証拠に天正11年(1583)2月18日「徳川家康知行宛行状」

(光西寺蔵松井家文書)から、家康はこの文書の文言の通り、まさに「東の境目」の城を守る松平康親の苦勞を勞い、河東の地(現在の静岡県富士・沼津市域)二万五千貫文を与えていることが読み取れる。この一字書出が発給されたのは翌年の3月のことである。儀礼の意味だけで発給されたとは思われない。

室町時代から武家社会では、主君の名前の一字を与えられることはこの上ない名誉なことであり、その家の家格が上がり主君との主従関係が強まることを意味していたという。

家康からすれば、このようなときに松平康親の子左近丞に一字を与えることによって、松井松平家との連帯感や主従関係をさらに強め、徳川家臣団の中における松井松平家の家



徳川家康知行宛行状

徳川家康知行宛行状
駿州於河東武万五千貫文余同
河東二郡之郡代之事
右年来在東境目苦勞仕致忠節候間
彼知行分之内山川海上野地共一切公方
綺無之所宛行不可有相違従以来増分
雖申出自其方相改致所務然者郡職之
事申付候上者於沼津諸公事等可有
異見者也仍如件
天正十一年
二月十八日 家康(花押)
松平周防守殿

書き下し文

格を上げてやり、家康に対する忠誠心を強めさせて、徳川領の東の境を強固なものにしようとしたのではなからうか。すなわち、この一字書出には、儀礼の意味と家臣団編成に利用したという2つの意味が含まれているのであろう。

(5) この一字書出によって、松井松平家は親子二代にわたって、家康から一字を与えられたことになる。(但し松平康親の場合は、一字書出が現存しておらず、『松井家譜』の記述によって確認できるのみである。)また、康親の代に「松平」姓を賜っており、いかに家康からの信頼が厚かったかが伺われる。それは、松井松平家が初代康親・二代康次のときに、徳川家臣団の中における家格や地位が確立されたことを意味しているのであろう。

(学芸員 井口 信久)

小仙波 4 丁目出土の円筒埴輪

川越市小仙波 4 丁目 3 番地 3 号の平井基夫氏宅では、その敷地内から、偶然に素焼きの焼き物が出てきました。平井氏は、その焼き物が古い物なのだろうと直感され、わざわざ教育委員会へお持ちくださいました。それが、ここで御紹介する古墳時代の「円筒埴輪」です。

「日本書記」によれば、垂仁天皇の御代、皇后日葉酢媛命の葬に際して、殉死の人々を生きながら陵墓に埋め込める習俗を改めるために、野見宿弥の建議を容れ、出雲国の土部百人を召し寄せて、人馬及び種種の物のかたちの「埴輪」を造らせたのがその始まりとされています。現在では、人や馬などの埴輪より、ここで紹介するような円筒埴輪の方が、先に出現することが知られており、殉死に代わる物として生まれたものでないことは分かっております。円筒埴輪の起源は、弥生時代後期の吉備地方（岡山県から広島県東部）で作られていた「特殊壺」とセットになる「特殊器台」にあるといわれ、古墳時代で初期の岡山県都月坂 1 号墳の円筒埴輪(1)が、「特殊器台」と「円筒埴輪」の過渡期のものとされています。

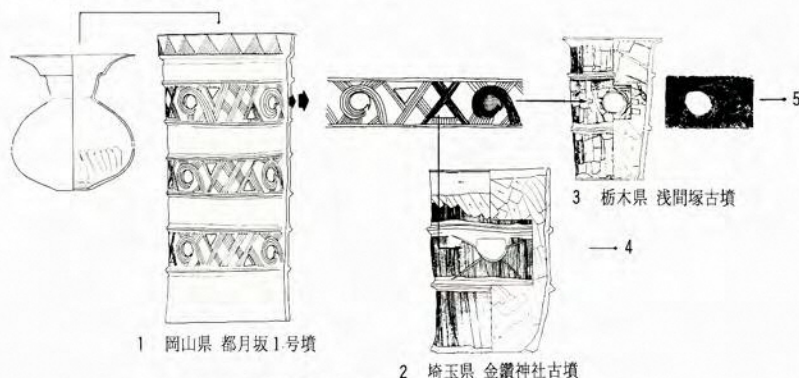
小仙波 4 丁目出土の円筒埴輪は、その上端の径が 3 で 32.4cm、4 が 27.2cm、いずれも下半部を欠失しているために正確な高さはわかりませ

んが、60cmほどはあると予想され、県内でも大きい部類に属するものです。丸い穴のスカン孔もいずれも 2 段確認されていることから、タガの数も 3 段以上であることがわかります。

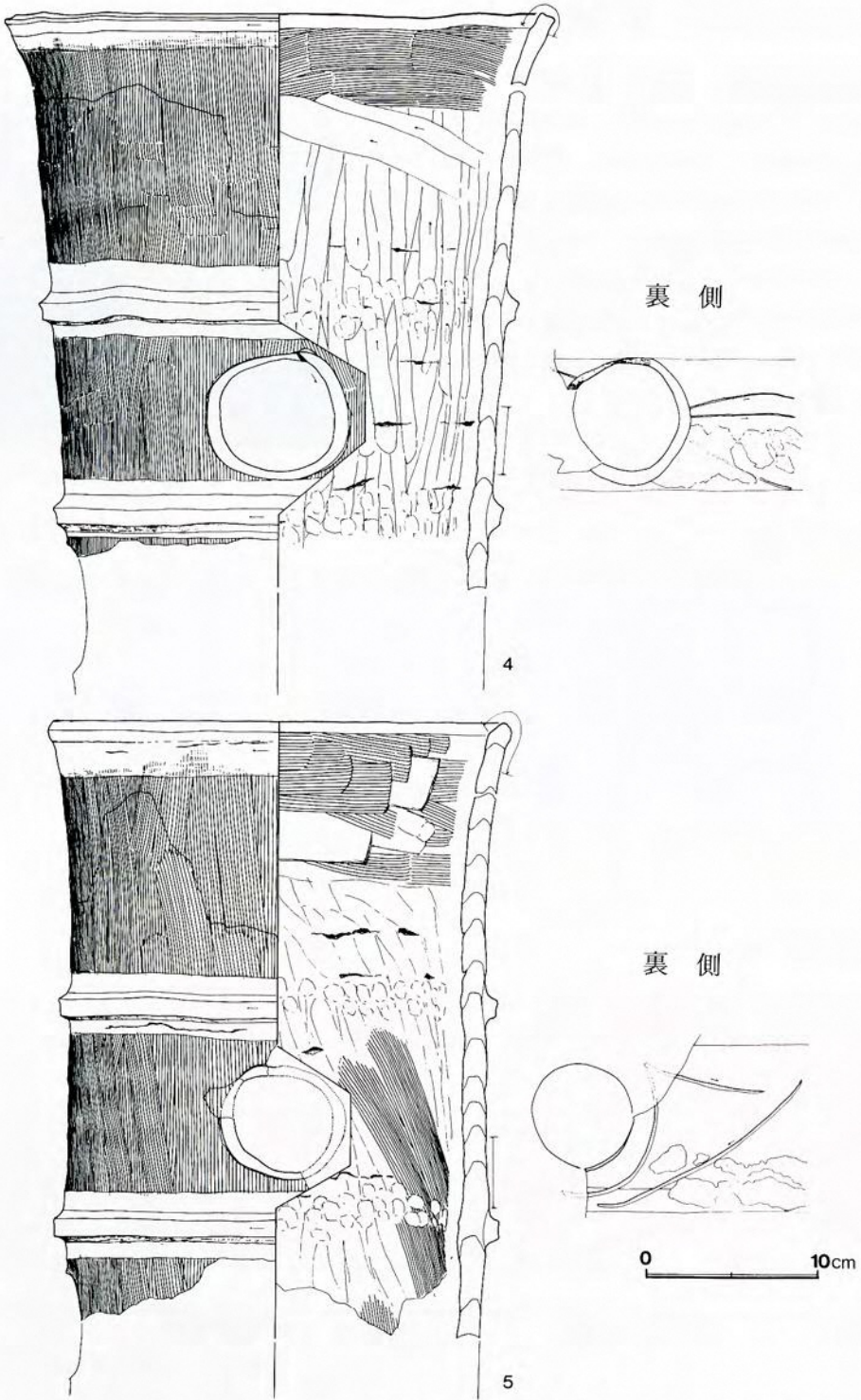
この円筒埴輪で注目される特長の 1 つは、スカン孔の周りにヘラ状の工具で描かれた線刻があることです。4 が「×」形、5 が巴形の線刻で、5 の巴形の線刻は、3 のように栃木県内等で数例知られる程度で、埼玉県内ではほとんどみつかっていないようです。実は、この巴形の線刻は、1 のような最も初期の円筒埴輪の側面に空けられた巴形のスカン孔及びその周りの線刻にその起源があると考えられます。この小仙波 4 丁目出土の円筒埴輪は、その形態的特長から 6 世紀前半のものと思われませんが、巴形スカン孔はその 100 年以上も前にすでにほとんど姿を消しており、この埴輪の製作者は「巴」の意味をどの程度理解していたのか、大変興味あるところです。

また、この円筒埴輪の出土により、この周辺には川越市内でも最大級の古墳が眠っていることが予想されます。

(川越市教育委員会 田中 信)
社会教育課文化財係



第 3 図 巴形の「×」形線刻の変遷



第4図 川越市小仙波4丁目出土土円筒埴輪

●●●ただいま開催中●●●

むかしの勉強、むかしの遊び

小学校3年生では、3学期に、社会科の授業で「川越市のうつりかわり」を学習します。博物館では、これにあわせて子供たちの父母、祖父母の子供の頃の様子を通して、歴史への興味関心を高めてもらおうと「むかしの勉強、むかしの遊び」と題して企画しました。

展示室では、昭和初期を想定した昔の教室や、茶の間の再現をはじめ、学校で使われた教材、教具、昔の遊びに関する資料を展示しています。

小学生の皆さんだけでなく、いろいろな世代の方にも好評をいただいています。ぜひ、ご覧ください。



会期 平成4年1月29日～3月10日

資料寄贈者名簿

敬称略 順不同

63年	小峰 四郎	尾崎 栄一	加藤 信吾	内田 徳次	長島 久
	堀江 周一	平林 伸二	安藤 英夫	服部 新助	船津 要
	室岡 勝	中本 順三	塚田 清一	守谷 弘	菅間 一男
	田玉 武士	佐藤 清	平田 国次	水谷康之助	武田 浩之
	藤田 勝	横田 宗吉	増田 勝美	野原米太郎	小宮山重四郎
	水谷 竹重	渡辺金次郎	菅沼 幸一	野尻 佳延	川越事務所

資料を寄贈いただき厚く御礼申し上げます。64年以降は次号以降でご紹介します。

ご寄贈いただいた資料は、今後「収蔵品展」等でご紹介させていただきます。

利用状況

月	一般			団体			共通				その他			合計 入館者合計
	大人	学生・生徒	児童	大人	学生・生徒	児童	大人	学生・生徒	児童	他館購入	招待	免除		
7月	1,159	147	264	214	188	1	429	31	37	540	29	1,333	4,372	
8月	3,434	645	865	176	0	62	1,447	192	212	2,026	95	1,349	10,503	
9月	2,698	248	388	350	0	0	1,434	96	100	2,023	110	1,578	9,025	
10月	3,790	146	339	422	0	4	3,147	40	58	3,670	291	5,359	17,266	
11月	4,899	253	505	944	75	0	2,389	93	162	4,740	376	7,712	22,148	
12月	1,336	98	130	166	19	0	772	35	21	1,105	52	4,762	8,496	

発行日 平成4年2月29日

発行 川越市立博物館

〒350 川越市郭町2丁目30番1号

TEL 0492-22-5399